

認識的二次元意味論と概念変化

木田 翔一

千葉大学人文社会科学研究所博士後期課程

本発表の目的は、チャルマーズ＝ジャクソンらの認識的二次元意味論は経験科学における概念変化を説明しないという批判に対し、認識的二次元意味論の改良とアприオリな概念分析の哲学的重要性の擁護を検討することにある。

チャルマーズ (Chalmers 2006) は認識的二次元意味論の目的を、クリプキによって分断された意味・理性・様相の黄金の三角形を修復することと見なし、一次内包 (意味) における必然性 (様相) をアприオリ性 (理性) と概念的に結びつけた (コア・テーゼ)。文表現の一次内包とは簡潔に言えば、ある認識的可能性が現実であるときにその分表現が真であるかどうかに関してアприオリに (あるいは合理的に) 把握可能な真理条件的内容のことである。そして認識的二次元意味論においては、主体による一次内包のアприオリな把握と、どの認識的可能性が現実であるかに関する経験的な情報が、文表現の現実の真偽を確定する。このことは、認識的二次元意味論はアприオリな概念分析が表現の意味論的内容の確定において第一に重要であるということを示している。

ブリガント (Brigandt 2013) は、このようなアприオリな概念分析の第一の重要性を含意する認識的二次元意味論の枠組みを、経験科学における概念変化と意味論の関係という観点から批判する。ブリガントの批判のポイントは、この枠組みは二つの欠陥を持つというものである。一つ目は形而上学的な欠陥で、認識的二次元意味論は概念を所持することを一次内包で特徴づけられるアприオリな能力として説明するが、そのアプローチは経験科学で用いられる概念に関して経験に基づく合理的な概念変化を排除しているということが問題である。二つ目は方法論的な欠陥で、個人の一次内包のアприオリな把握によって概念を所持することを説明する認識的二次元意味論の枠組みは、経験科学で用いられる概念が科学コミュニティにおける意味論的な多様性に基づいて概念変化する例を説明するだけの道具立てを備えていないということが問題である。

本発表において私は、上記のブリガントの批判に対し、認識的二次元意味論の立場からの応答の可能性を検討し、必要であれば改良案を提出し、アприオリな概念分析の重要性を擁護する議論を行う予定である。